平成18年度第1回北信越･東海ブロッククラブ育成推進協議会　報告

日時:平成18年9月2日(土)　13:00～17:00
会場:石川県立生涯学習センター　　31号室

少し早い秋の高気圧が日本列島を覆い、すがすがしさと暑さがせめぎあう９月２日、前田利家が築いた加賀百万石、金沢城跡の袂の風光明媚な場所にある石川県立生涯学習センターにおいて、第１回北信越・東海ブロッククラブ育成推進協議会が開催されました。日本体育協会から４名、北信越・東海ブロック地方企画班員・各県体協担当者・クラブ育成アドバイザー・育成指定クラブ関係者等総勢５２名が参加しました。今回の協議会は、「各クラブの原点を見直そう！！」という全体コンセプトに基づき、シンポジウムとグループ別協議が行われました。日本体育協会西田生涯スポーツ推進部長、石川県体育協会柱山専務理事の挨拶に続き、シンポジウムでは、石川県かほく市の「NPO 法人クラブレッツ」を取り上げ、設立の原点から今日に至る道すじ、そしてこれからどんな道すじを描いていくのかについて、プレゼンテーションとディスカッションが行われました。その後のグループ別協議では、シンポジウムを受けて各クラブの原点を見直すとともに、それぞれのクラブの強みや弱みを明らかにして、強みを生かし、弱みを克服するクラブ作りのあり方について活発な協議が行われました。最後に、グループ別協議の内容について、都市部・中間部・山間部の３グループの代表から報告が行われました。

【1】 シンポジウム報告

シンポジウムは、地方企画班員の柳見沢宏氏にコーディネーターをつとめていただき、パネリストとして、地方企画班員で NPO 法人クラブレッツのゼネラルマネジャーの榎　敏弘氏、同クラブのクラブマネジャーである西村貴之氏、クラブレッツと事業提携を行っている株式会社エイムの常務取締役である馬田良一氏をお迎えし、「クラブレッツの設立原点とこれまでの道筋、そしてこれからに向けて」というテーマで行われました。

まず、榎氏からクラブレッツの概要と、クラブ立ち上げの経緯について報告されました。クラブの立ち上げの最も原動力となったことは、クラブへの「思い」と「願い」にあること、そして、この「思い」と「願い」が、榎氏の過去のスポーツ指導者としての内省にあるとのことでした。中学校教員として剣道部の顧問をしていた際、全国制覇を果たしながら、その全国制覇に貢献した教え子たちが剣道から遠ざかってしまい、むしろ、補欠だった子どもや競技力がそれ程高くない子どもたちが地域に戻ってきて剣道を教えてくれる実態を見たとき、「私のやってきた剣道指導は一体なんだったのか？」という強い反省が、地域に根付いた生涯にわたってスポーツに親しむことができるスポーツクラブを作る強い原動力になったとのことでした。また、クラブ作りの過程においては、海外を廻っての経験を生かしながら、若者が町を語れるような機会を大切にしながら進めてきたことが報告されました。そして、「設立がゴールではなくスタートである」あるいは「本物に近道なし」といった設立に際しての教訓を示唆していただきました。

次に西村氏より、クラブマネジャーとしての自らのクラブへのかかわり方の姿勢や、様々な事業の紹介をしていただきました。イベント等の活動の中で、「笑顔と思い出づくり」を大切にした事業や、世代ごとの事業を単体で考えるのではなく、小学校（小学生）・保護者・大学生等、様々な世代をつなぐのがクラブの役割であるといった考え方に基づいた具体的な事業紹介がありました。また、地元企業の社会貢献活動にクラブレッツが寄与する可能性についてもお話していただきました。そして、西村氏自らのクラブへの関わり方、あるいはスタッフのクラブへの関わり方の根幹を成す姿勢として、『クラブ作りを楽しんでいますか？』という問いを絶えず意識しながら仕事をしているとのことでした。地域の若者が集まり、思いの共有による協働によって、金では買えない達成感をスタッフが味わうことが大切で

あるとのことでした。
　最後に、馬田氏から民間スポーツクラブの立場からのクラブ作りのあり方についての発表がありました。日本の民間スポーツクラブの参加率が約３％であるのに対し、ヨーロッパでは約１５％、アメリカで約７％であり、ヨーロッパやアメリカの民間スポーツクラブへの参加率の高さを支えているのは、地域スポーツクラブの活動による底辺の拡大にあるとのことで、民間スポーツクラブの立場として、地域スポーツクラブに大きな期待を寄せているとのことでした。馬田氏のクラブ経営の成功を支える観点として、１.理念の明確化、２.非日常空間の演出、３．すべてはお客様のために、という３つの観点が不可欠であるとのことでした。そして、指定管理を受けていく際のポイントとして、リーダーの魅力、リーダーのマネジメント力、対価に見合ったサービスの提供、人・モノ・金を上手く利用する・経費を減らし収入を上げる仕組みの追及といった点が上げられました。
　コーディネーターの柳見沢氏から、なぜ魅力的なクラブレッツを作ることができたのかを探る観点として、榎氏、西村氏、馬田氏がこれまでどんな経歴を持ち、その中でどんな思いや問題意識があって今のクラブを立ち上げ、運営しているのかについて紹介していただくよう示唆され、それぞれの方からこれまでの人となりをご紹介していただきました。
　フロアとの質疑では、スポーツの指導者としてクラブ作りをする際の思いについては、榎氏から自分の剣道の道場を作りたいという最終的な理想が現在の思いにつながっているとの回答、若者をひきつけるためには、とにかく多くの若者に接していくことが大切との回答、効果的な広報のあり方としては、口コミと広報誌での内容の工夫（会員の写真を載せてあげる）との回答、マーケティングの手法については、商圏設定と競合の把握、そして差別化が必要との回答がありました。
　まとめとして、コーディネーターの柳見沢氏より、長野スポーツコミュニティクラブ東北を立ち上げた経験から、総合型地域スポーツクラブがこれまでのスポーツのとらえ方では通用しない新しい概念であることから、時間をかけてじっくりと育てていくことの大切さが示唆されてシンポジウムが閉じられました。

【2】 グループ協議報告

　グループ協議は、シンポジウムをうけて、「各クラブの設立に至った原点とこれまでの道すじを見直し、各クラブの経営資源を生かしたこれからのクラブの目指す方向を明らかにする」というテーマで行われました。各クラブは、地域特性、歴史、スポーツの根付き方、地域規模が様々であることから、できるだけ同じような地域特性（都市部・中間部・山間部）や地域規模（人口規模）を１グループとして、全９グループによって協議を行いました。各クラブの地域特性や設立のきっかけ、クラブの強みや弱みを出してもらい、その強みをどう生かしていくのか、あるいは弱みをどう克服していくのかについて、クラブ育成アドバイザーを進行役として進めていきました。比較的同じ地域特性や地域規模同士のグループを設定したため、協議が盛り上がった感がありました。
　その後、以下の３つのグループから代表して協議内容を発表してもらいました。

　まず都市部を代表して、静岡県クラブ育成アドバイザーの海野富江さんから発表していただきました。このグループからは、比較的行政が協力して推進してくれていることが助かっていることや、指導者同士の連携、民間との連携を図って魅力あるプログラムを次々に出していくことが重要であるとのことでした。また、そのためにはアンテナを高く張って情報収集していくことが大切であるとのことでした。
　次に山間部を代表して、愛知県体育協会の藤村文也氏から発表していただきました。山間部は人口が少ない、

高齢者が多いといったことがあげられるが、人間関係ができている、イベントにこぞって集まってくれる、あるいは小学校や病院跡地が使えるなどといった山間部ならではの利点が多いことから、このような利点を最大限活用しながらスポーツクラブを作っていくことができるといった発表がなされました。

三つ目に中間部として岐阜県体育協会の野田光浩氏から発表していただきました。このグループは、特に大学との連携が今後のクラブの大きな魅力になるという発表がありました。大学の人材や研究といった資源を活用していくことがクラブ作りにメリットとなり、また大学にとってもメリットとなることから積極的な相互互換を行うことが提案として出されました。

以上の３つの発表をうけて、先のシンポジウムのパネリストであった榎氏、西村氏、馬田氏から、大切なこととして、できることをすぐ行う、悪口や言い訳を言わない、強みを輝かせることが大切であるといったコメントをいただき、グループ協議を終えました。

最後に、小倉班員から総評と閉会の挨拶をいただき、会を閉じました。

【3】 まとめ

第１回クラブ育成推進協議会では、「各クラブの原点を見直そう！！」というテーマで熱心な議論が展開されたように思います。特に、開催県石川のクラブレッツというすばらしいクラブの事例を基にして、参加された方々が自らのクラブをもう一度じっくり見つめ返してみるという手続きを踏むことにより、最終的には、クラブを作っていく、育てていくヒトの人間としての力＝「人間力」が魅力あるクラブ作りの原点になるということを共通認識することができました。参加された方々のそれぞれに違った魅力ある「人間力」が、地域に戻ってクラブを育成していく力になるのではと、期待を込めながら感じました。

（全体調整･報告：北信越･東海ブロック地方企画班長　西原康行）